鹿児島市日中友好協会

# 東方友誼（とうほうゆうぎ）

発行所
鹿児島市日中友好協会
海江田　順三郎
〒892-8555
鹿児島市千日町１番１２号
（タカプラ内）

本　部：海江田 順三郎
TEL 099-226-2161
女性部：天達 美代子
TEL 099-254-1402
学生部：黄 佳
TEL 080-5206-5657
交易部：赤塚 晴彦
TEL 099-250-1313
企画部：大石 慶二
TEL 050-3456-5228

## 『望まれる更なる交流の促進』

鹿児島市日中友好協会会長　海江田　順三郎

新年お目出とうございます。昨年は鹿児島市と長沙市の友好都市盟約二十五周年の祝典が十月下旬に長沙市で開催され鹿児島市当局の他、市民有志百二十名がチャーター機を利用して参加しました。現地での式典の際に、私は図らずも「友好の使者」の称号を授与される光栄に浴しましたが、これは私個人に対してより、鹿児島市日中友好協会のこれまでの実績が評価された故のことと、会員の皆さまのご協力に改めて感謝申し上げる次第です。

祝賀会場では、九月に南洲公園に建立しました「黄興先生南洲墓地参詣之碑」のカラー写真を入れた額を鹿児島市日中友好協会よりの贈呈として、私から長沙市長へお渡しさせて頂きました。

式典の前日に表敬訪問しました長沙市対外友好協会で、当協会の天達美代子女性部会長が、長沙市対外友好協会理事の委嘱状を受領され面目をほどこされました。　長沙市副書記の吳志雄氏は対外友好協会を代表して歓迎の挨拶の中で「黄興碑の建立など大変立派な事業を実施していただいて感謝申し上げます。ただ今後、鹿児島市と長沙市との経済交流に是非力を入れて欲しい、それに観光客も韓国に比べ、鹿児島や日本からは数が少ない」と率直な要望を述べられました。今年は当協会として、交易部を中心に経済交流訪問団を是非、長沙市へ派遣したいと希望します。とも角、日中友好協会が花も実もある双方互恵の関係に望まれつつあることを実感いたしました。

## 『黄興師の孫娘との出会い』

翌日念願だった張家界の観光を終えて夜、ホテルに帰り着いた所ガイドから「黄興師の孫娘に当るご婦人が貴方に会いたいと先程から待っておられます」と告げられました。予期しないことで内心の興奮をおさえながら、ロビーに駆けつけますと、前から面識のあった王さん（長沙市外事弁公室副主任）の紹介で、黄儀荘女史と夫君に初対面の挨拶を交わしました。ご夫妻は、二十五年前からサンフランシスコに在住し、黄儀荘女史（黄興の孫）は、カリフォルニア州湖南友誼会（県人会）の会長を務め、夫君は市水道局関係の職を定年で退任されたとのことでした。黄儀荘女史は、祖父黄興の家系図を書きながら、辛亥革命の武昌蜂起に失敗した黄興師が討伐軍の重囲に陥り、危機に瀕した際、黄儀荘女史の祖母に当たる徐宗漢女史が黄興師をかくまい、顔かたちを変装させ、黄興とは全く別人の夫婦と名乗って、検問を逃れたとのエピソードを話されました。このことが機縁となり、徐宗漢女史は黄興師の二番目の夫人となり、一番目の夫人の生んだ3人のご子息とは別に2人のご子息を黄興師との間に設け、その中の一人、黄一美の長女が今回ホテルでお会いした黄儀荘女史に当ります。黄儀荘夫妻は、日中友好協会が黄興師の記念碑を建立したことを知り、こんな嬉しいことはない。お礼を述べたくて訪ねて来ました。鹿児島に行き、黄興碑を見たいと熱望され、固い握手を交わして別れを惜しまれました。

黄儀荘女史ご夫妻と
（黄興の孫娘）

2007年９月２３日　除幕式。南洲公園

## 『鹿児島市と長沙市友好都市盟約二十五周年記念式典』

鹿児島市日中友好協会 会計　菊池　俊一

２００７年１０月２６日、鹿児島市・長沙市友好都市２５周年を祝う式典と祝賀会が開催され、鹿児島市から森博幸市長ら代表団や市民交流グループ１６０名が参加した。会場となった長沙市国際映像コンベンションセンターにはこれまで交流に関わった両市の関係者らが多数出席し、今後、さらに親密な友好関係が促進されることを誓った。中国では改革開放が始まり、市民生活の中にも対外交・友好都市交流が浸透し始めた１９８２年、この年の１０月３０日、鹿児島市と長沙市は正式に友好都市盟約を締結した。この日、出席者に配布された写真集には、当時の鹿児島市長山之口安秀氏と長沙市熊清泉氏が、友好都市締結を祝う乾杯の写真を掲載していたが、その後、２５年間で、鹿児島市から計１５５回、のべ２６５７人が長沙市を訪問した。長沙市からは計１１９回、のべ９３７人が鹿児島市を訪れ両市は、人材育成、経済協力、文化交流などですばらしい成果を挙げたと記されている。前座では、長沙市の少年少女の踊りや歌が、一方鹿児島市からは、大正琴の演奏、日本舞踊などが披露され、舞台では小学生と思われる男の子が可愛らしい笑顔とよく通る声で出演者を紹介し、見事な司会であった。　式典では、先ず、長沙市副市長から両国の主な出席者の紹介があり、譚仲池長沙市長・森博幸鹿児島市長が挨拶次に、赤崎義則長沙市名誉市民が挨拶した後初回の鹿児島・長沙友好使者１０人に「友好の使者」として表彰状が授与され、鹿児島市日中友好協会会長海江田順三郎氏ら１０名に記念の盾が贈られた。海江田順三郎氏は「友好の使者に選ばれましたことを大変光栄に存じます。鹿児島市日中友好協会は、長・鹿両市の盟約２５周年記念事業として、「黄興先生南洲墓地参詣の碑」を鹿児島市の南洲公園に建立しました。」また、長沙市第一病院張莉氏は、「人生の幸運に恵まれて、鹿児島を訪れ鹿児島で培った友情は心に深く刻まれている。研修を終えて帰国し今は仕事で成功を収め、長沙と鹿児島の友情は永遠に続く」と喜びを表した。終わりに、両市長２００８～２０１２年の交流協議書にサインを交わし、祝賀会では、鹿児島市日中友好協会会長海江田順三郎氏が長沙市譚仲池市長へ「黄興先生南洲墓地参詣の碑」の額入り写真を贈呈した。

今回、初めて友好訪問団に加わり一行と行動を共にした。中国長沙市は湖南省の省都で人口６００万人を超える大都市として栄え、目覚しい経済発展を続けている。鹿児島市はこれまでナポリ市、パース市、マイアミ市とそれぞれ姉妹盟約を、長沙市と友好都市盟約を締結し各分野で交流を続けているが、中でも長沙市とは、気候風土が似通っていて、同じアジアの文化圏にある安心感からか、他の姉妹都市に比べ草の根の交流が定着していることを肌で感じた。私は、ごく最近習い始めた中国語で片言ながら会話を交わす機会に恵まれたこと、何にも代えがたい貴重な体験であったと感謝している。

## 『武陵源ユネスコ世界自然遺産』

湖南省の西張家界市にある張家界森林公園は、長沙市から高速道路を利用して四時間かかる。一九九二年ユネスコ世界自然遺産に登録された「武陵源」を見学した。ゲート前は朝早くにもかかわらず各地から多くの観光客が入場待ちで並び、グループにはぐれたら確実に迷子になるだろう。この時ばかりは旅行社が準備してくれた赤い帽子がよい目印になり役立った。もともとこのあたりには、少数民族土家（ツージャ）族が住んでいて地名はなかったが同地区の保護・開発をするに当たり、背後に見える武陵源山脈から「武陵源」の名前を取って世界自然遺産に登録された。いまでも、土家（ツージャ）族、苗（ミャオ）族、白（バイ）族が暮らしている。と現地ガイドの膨さんが説明してくれた。武陵源ゲートを通過すると、園内バス二台に分乗し屋外エレベーターで「百龍天梯」に向かう。山と山の間に切り立った奇峰が連なり山水画の世界に入っていくが、とにかく視界が悪い。ガイドによると、いまの季節は丁度稲刈りが終わり、一斉に藁を燃やす煙でかすみがかかっているのだと説明する。しかし、これは二酸化炭素による大気汚染によるものではなかろうか。同行の友人もこの考えを否定しなかった。これまで、中国を旅して青空と眩しい太陽の光に出会った試しがない。どんよりとしたフィルターを透し、うす赤い太陽を直に見ることが出来る。成都や上海など大都会の景色は、青空をバックに眺めることができればどんなにか美しいだろう。

だが、山水画の世界は、かえって遠近感がありあまり気にならないから不思議だ。岩山の壁に取り付けた観光エレベーター「百龍天梯」は二〇〇八年八月運用開始で三基設置されている。高さ三二六メートル三二階をわずか二分で頂上に達した。内バスを利用して「天下第一橋」へ向かったが、途中添乗員がグループの人数を確認したところ「どうも一人多いような気がする」と言い、何回も数えるがやはり一人多い。だれか二号車の人が混じっていないか聞くが誰も返事をしない。仕方なく全員の名前を呼び確認したところ、名前を呼ばれなかった一人が二号車の人だと判明し、本人を含め大笑いした。　天下第一橋は天然の橋か作られたものか不明と言うことだが、橋を渡って左側へ回ると絶景が現れる、途中、名前や願い事を掘り込んだ錠前をぎっしりぶら下げた社に十元の賽銭を奉納した。午後は、「賀龍公園」、天下の絶景「御筆峰」・「仙女献花」を見学の後天子山ロープウェーで下山。再度武陵源ゲートに戻り、張家界森林公園内の「金鞭渓」を散策した。二日目は朝からあいにくの雨模様になったが、今回のツアー最後の観光地張家界の最高峰天門山を訪れた。七・五キロのロープウェーを利用し、展望台からの眺めを楽しむ予定だったが、霧のため視界が悪く遠くを望むことは出来なかった。　この山は、凹凸がはっきりしており山の頂上には「天門洞」という大きな洞窟があるそうで、この洞窟までは、九九九段の階段を上っていく。雨に濡れた幅の狭い階段は、高齢者には少し無理のようだ。この悪路に数人のメンバーが果敢にも挑戦した。張家界の天門山観光を終え、全ての日程を終了した参加者は疲れと満足の表情が入り混じり無事ホテルに帰着した。

## 『中国日本語教育事情』

元安徽農業大学外国語学部日本語科教師　加治佐　愰

中国の友人によれば、今第三次の日本語ブームだそうです。だいたい十年に一回ぐらいこのような事があったと言うことです。最初は一九七八年に「日中平和友好条約」が締結されたころです。両国間の頻繁な相互訪問によって、両国関係の順調な発展が保証されました。日本への関心が高まり、ラジオ講座などで学びました。二回目は一九八六年から改革開放政策が始まり、日本との貿易も本格的になり、そのバスに乗ろうとして日本語学習者が増えました。一時下火になっていたそうですが、十年ほど前から改革開放が積極的に推進され、諸外国からの投資が拡大し、世界の工場と言われるようになりました。中でも日本の大企業が、広い土地、安価な賃金、期待される購買力などを求めて殺到しました。進出した日本の企業は、当初従業員教育として会社で日本語を教えていたそうですが、あまりにも多くの工場が進出し、自前では養成が困難になりました。そこで中国政府や地方の都市に働きかけ、学校で日本語を教えるようになったということです。日本企業が求めている人材は、通訳や翻訳は勿論ですが、現地の中間管理職として、少ない日本人と多くの中国人労働者との橋渡し役です。日本側の意図を確実に伝え、中国人の考えを伝えて、スムースに企業活動が推進できることを望んでいるからです。中国人にしてみれば日本企業に勤めることは憧れです。国内企業より確実に給料は高いし、福祉関係も整備されています。日本語ができれば給料を二倍以上もらえます。また最初から管理職です。こんなおいしい話はありません。現実的で、実利的な中国人が飛びつくのは当然です。需要供給の原則が生きています。かくして第三次の日本語学習ブームが到来したわけです。友人によれば、今回の日本語熱は異状だそうです。以前の二回とは比較にならないほどの熱狂ぶりだといいます。日本との関係において「政冷経熱」と揶揄されますが、「教熱」といってもいいでしょう。ここ五年間ぐらいのうちに、既存の大学に日本語科を設置したり、新たに大学、専門学校、塾などが作られました。今の大学生たちの親が中学生のころは、文化大革命の嵐が吹き荒れ、学校どころではない時代でした。ですから学歴のないことの悲哀が身に沁みています。ましてや今は一人っ子政策で、都市部では、子供は一人ですから、何とかして大学に進学させようとします。夫婦共働きで頑張っても大学生を抱えると一家の生活を圧迫します。それでも子供の将来のためにと耐えています。農村の生活はもっと大変です。農業に従事するには人手がいります。ですから一人っ子政策は最初のころ農村にはあまり厳格でなかったようです。３，４人子供のいる所もあります。ここ十年ほど、毎年二桁程の経済成長を遂げながら、庶民の生活は一向に向上していません。特に農村部と都市部との格差はますます隔たってくるようです。今でも中国の八割以上は農民です。彼らは自分たちの世代は仕方ないが、せめて我が子は都会で頭脳労働者として裕福な人生を送って欲しいと願っています。ですから色々な奨学金を利用したり、親戚、知人から借金をして学資を作ります。私が勤務していた安徽農業大学には、十九の学部があります。学生は二万六千人、教職員が二千五百人います。家族を含めて三万人程が校内に住んでいます。学生は全寮制、職員の宿舎も学校が確保してくれます。退職後も校内に住んでいる人もいます。この大学に日本語科ができたのは

# 「突然の発症」

九江学院日本語教師　池田光栄

４年前です。只今４年生が最上級生です。大学卒の学歴と、日本語を学び日本に留学するか、日本語を使う仕事に就きたいと思って入学してきました。彼らの日本語との出会いはテレビの漫画や、アニメーションです。日本の優れた技術で作られたものに、幼児であった彼らは魅了されました。言葉は分からなくても、綺麗な絵を見たり滑らかな言葉を聴くことがとても楽しかったと言います。そのころの漫画の歌を諳んじていて、私よりも上手に歌えます。私どもが小さいころ、アメリカの音楽や映画から、アメリカに憧れたようなものかも知れません。この二十年間の中国への様々な進出が、日本への憧れとなり日本語学習熱を煽ったものでしょう。かつて日本は、中国から漢字を初めとして多くのことを学びました。中国との交流は日本文化に大きな影響をもたらしました。今やそれが逆転して、日本に学ぼうとしています。政治的にはともかく、庶民は両国の正しい交流を望んでいるのです。

## ２００７年１０月２９日　月（曇り）在中国九江

平常どおりの生活をし、午後の授業に備えていたとき、突然胸が張り裂けそうな痛さを覚え、冷や汗をかいて床に倒れてしまった。これはただ事ではないと、階下のネパールの外国人教授を呼び、国際交流センターのオスカーさんの運転で学院の病院へ運んでもらった。血圧、心電図をとり、即、入院と相成った。このときは、すでに痛みは治まっていたが、当分検査入院を余儀なくされることになる。

## ２００７年１０月３０日　火（曇り）在中国九江

検査のための手術を受ける。部分麻酔を受け右手動脈に器具を挿入。造影剤を注入し、心臓および周辺の機能を映像で映してもらった。病名は冠心病。検査の結果、不全動脈の血流をスムーズにする治療をしなければならないということになった。九江で治療するか日本へ帰って治療するかを決めねばならなくなった。主治医は家族とも相談して決断するよう促した。また、検査手術を受けるにあたり、２０項目以上の確認事項を読まされ、これに同意のサインをした。同僚の先生方も授業の合間を見て、見舞いに来てくれる。生徒たちがあまり次々見舞いに来るので、病院側が調整するように学校側に申し入れたらしく、今日ごろから人数を減らしてきた。その代わり、２名づつ必ず付き添ってくれるようになった。昼は女子学生、夜は男子学生である。特に男子学生は不眠で付き添ってくれた。

## ２００７年１１月３日　土（晴れ）在中国九江

特にお世話になった人。九江市外事弁公司の于紅さんには特別にお世話になる。彼女は私のために何日も職場を休んで食事を運んだり、病院との交渉ごとに取り組んでくださった。あとで分かったことだが九江市で初めて外国人が入院したというので、万善を期すように上司に言われたそうで。その後は公務で来てくださった。その上司も花を持って見舞いに来てくださる。また、呂栄さんも毎日ベッドを訪れ、手作りの食事を運んでくれる。

## ２００７年１１月７日　水（晴れ）在中国九江

入院していても日はどんどん過ぎていく。さて、日本へ帰って治療するか、九江でするか、決断しなければならない。日本で治療したほうがいいと薦める人はたくさんいた。でも、１１月２９日緊急入院以来朝６時ごろトイレにおきると決まって小さな発作が起きる。時には冷や汗が出るほど抓めることもある。如何にして日本までたどり着くか、とても自信がない。妻と相談し、家族にもその旨連絡し、九江で治療を受けることに決断した。

## ２００７年１１月８日　木（晴れ）在中国九江

手術にあたり、担当医師から「不安はないか」「鎮静剤をあげましょうか」と提案があったが、自分としては何の不安もなかった。平安そのものである。神がともにいてくださるのに何の不安があろう「鎮静剤はいりません」ということで手術台にあがることにした。午後３時、迎えの車が来て、手術室に運ばる。てっきり、付属病院の施術室と思いきや、七一七解放軍病院の施術室に運ばれた。この場所は１９４５年８月までは日本軍の陸軍病院であったところ。なにか不思議な縁を感じる。３時１０分、南昌から出張された、博士が執刀されることなる。この博士四十代の人で、経験、技術ともに豊富な方と聞く。局部麻酔をうち、体のあちこちに心電図のアタッチメントをつけられた。ツッ・ツッ・ツッ・・という定期的な音と、目前にライトが強く感じられた。でも気分は安定している。６７年前、この地で他界した弟の姿が急に浮かんだ・「清ちゃん、兄ちゃんも手術だよ。見てナ」また、「主よ、あなたの十字架の苦しみは如何ばかりでしたでしょう。そのおかげで、世界中の人々が、死から解放されました。僕も平安です。もし、この世で命を落としても、あなたの国へ移されるなら、もっと幸いです。すべてをみ手に委ねます。生きるのも主のため、死ぬるもまたよし」と祈る。右手首を切開し穴をあける。次に心臓まで挿入する器具が装着され、局部麻酔が打たれ、疾患部分の動脈を広げる作業に入る。何か異物が手首、腕、右骨下、心臓へと入っていくのが感じられる。多少の痛みも感じる。「ＯＫ」「ＯＫ」という医師たちの掛け声がはっきり聞こえる。「ハーラ」（成功・終了）の声。約４０分間で手術は終わった。「ハーラ」。医師たちはマスクをはずし、自分もモニター室に運ばれ、術前の悪い血管の部分の動画と、器具挿入し、血管を広げる作業の動画、および、作業終了後に、血管が正常に働いている動画を見せてくれた。まったく、感謝！「新しい命をもう一回いただいた」という実感。

## ２００７年１１月１５日木（晴れ）在中国九江

体力も日々加わり、３０分ぐらい屋外にでて歩くが、なんの障害もでない。いよいよ退院日も近い。皮下注射も１回となり検温もなくなった。確実に正常になりつつある証拠だ。感謝！呂栄のこと。彼女は毎日午後食事を運んだり、身辺の世話をしてくれる。「そんなにがんばると疲れるよ」といっても、「何もしないでいることのほうが疲れます。心配しているより、先生のそばにいたほうがいい。」といって聞かない。時々は、私の好きな天津栗を買ってきて、剥いて食べさせてくれる。マッサージをしてくれる。いやはや身内のように熱心である。孫の看病と理解して感謝して受ける。昨日の新聞取材で、九江晩報に入院生活の記事が写真入でていた。散髪屋にいくと、「あ、今朝新聞に出ていた人だ」といって喜んでくれた。すっかり有名人になったものだ。あすは退院となると、少し興奮気味でなかなか寝付かれない。バカヤローの公樂！主に頼るものは平常心平常心。しっかりせいと自分に言い聞かせる。

## 2007/03/10～14　日中友好協会交易部の中国義烏視察ツアー

３／10から3／14にかけて、日中友好協会交易部の中国義烏視察ツアーが開催されました。参加者は、鹿児島から参加した13名に加え上海で２名が加わり、合計１５名の参加者となりました。まず初日は、上海浦東空港到着後ホテにチェックインし、黄浦江クルーズ等の市内観光を行いました。二日目は、観光地に立ち寄りながら義烏へ移動。そして、三日目、義烏市場の視察に入ります。現地では中国の貿易会社の方が二名、加わりました。義烏市場は中国最大というだけあって本当にでかいです。中国人はもとより、世界中のバイヤーたちが安い商品を求めて集まって来ます。この市場には大きな建物が何棟もあって一日急いで回っても、少ししか見られなかったというのが本音でした。義烏市場をすべて見て回るには、最低でも一週間は必要かなと思われます。

## 2007/05/12　１９年度（２２回）鹿児島市日中友好協会通常総会･懇親会開催

鹿児島市上荒田・ジェイドガーデン・パレスにて第２２回通常総会&懇親会が開催されました。今年は、日中国交正常化３５周年の年に当たります。また、鹿児島市と長沙市との友好都市盟約２５周年の記念すべき年でもあります。この記念すべき年に中国の温家宝首相が来日されました。日中首脳会談の結果、戦略的互恵関係の強化方針が打ち出され、要人往来や経済対話を加速させる必要性が確認されました。温家宝首相の「氷を溶かす旅」の結果次第では、民間レベルの交流が予想以上に活発化することも予想されます。学生部は、中国留学生への支援事業をますます充実させつつあります。女性部も市民の関心を受けるようになってまいりました。　一昨年発足した交易部の活動も徐々に本格化してまいりました。当協会としてはこれらの活動がより円滑に運営されるよう支援します。

## 2007/05/20　春天１日バス旅行（開聞岳登山～知覧武家屋敷巡り）

５月２０日（日）快晴。朝：鹿児島大学図書館前を出発。am7:35中国人留学生３７名、日本人学生９名、協会世話人５名合計５１名で１台の小型面包車と５０名乗り大型バスで開聞山麓をめざしました。全体を仕切ったのは鹿児島市日中友好協会学生部と鹿児島大学中国留学生学友会である。開聞岳は登り時間２時間３０分、下り２時間といわれ、思いのほかタフな山と言われている。学生達の服装は軽装でとても登山スタイルとはいえないが、若さにまかせて皆すいすいと駆け上がっていく。子供をまじえ１０名程が途中で断念したが３７名程が山頂に立ち、ブルースカイに包まれた３６０度の大パノラマを満喫したことだろう。生憎、少しもやがかっていたが、遥か彼方に屋久島･宮之浦岳を望むことが出来た。最初の計画では下山後、長崎鼻に行き弁当を食べるつもりでしたが時間が無くなったので武家屋敷に向かった。

## 2007/07/7　協会交易部総会＆懇親会開催

２００７年７月７日（土）サンロイヤルホテルに於いて第３回鹿児島市日中友好協会総会が開催されました。おりしも梅雨の終わりの豪雨のなか、昼頃はあの１３年前の八六水害の再来を思わせる天候でしたが、夕方には嘘のように空が明るくなり無事、総会が開催され、続いて行われた懇親会では会員のたのしい交流が展開されました。２月に行われた『義烏視察ツアー』の思い出話に花が咲き和気藹々のうちに散会となりました。

恒例の特別講演では鹿児島相互信用金庫外為課副部長『村田秀博氏』による『鹿児島県特産品の中国輸出等について』があり会員は熱心に聞き入っていました。

## 2007/08/26　中国人留学生と行く夏天１日バス旅行

８月２６日（日）快晴。

参加者：中国人留学生４３名、日本人７名、パキスタン１人、ミャンマー１人合計５２名　企画：鹿児島市日中友好協会企画部／主宰：市日中学生部・鹿児島大学中国留学生学友会１台の小型面包車と５０名乗り大型バスで熊本～阿蘇をめざしました。熊本城は現在、築城４００年ということでいろいろなイベントが行われています。協会主催としては初めての県外ツアーということで申込が殺到しました。そろそろ夏も峠を越すだろうと予想していましたが残暑の厳しさは例年に無いものでした。

## 2007/10/26　鹿児島市と中国長沙市友好都市盟約２５周年記念式典

２００７年１０月２６日、《鹿児島市・長沙市友好都市２５周年を祝う式典》と祝賀会が開催され、鹿児島市から森博幸市長ら代表団や市民交流グループ１６０名が参加した。会場となった長沙市国際映像コンベンションセンターには、これまで交流に関わった両市の関係者らが多数出席し、今後、さらに親密な友好関係が促進されることを誓った。中国では改革開放が始まり、市民生活の中にも対外交・友好都市交流が浸透し始めた１９８２年、この年の１０月３０日、鹿児島市と長沙市は正式に友好都市盟約を締結した。その後、２５年間で鹿児島市から計１５５回、のべ２６５７人が長沙市を訪問、長沙市からは計１１９回、のべ９３７人が鹿児島市を訪れ、両市は人材育成、経済協力、文化交流などですばらしい成果を挙げたと記されていた。

## 2007/11/3　おはら祭に遠方より友来る。

１１月３日に行われた鹿児島市恒例の秋祭り「おはら祭」に長沙市からふたりの友人（かって鹿児島市に交流員として来ていた）がやってきました。今年が友好都市盟約２５周年ということで例年より多くの長沙人が来鹿しました。鄭旗さんは現在長沙市旅遊局で主任として活躍しています。女性の袁静さんは同じく市役所の外事弁公室の副所長として活躍しています。２日、３日とも１時間にも満たない再会でしたが楽しい時を過ごせました。又、昨年から始まった「照国表参道」でのバザー出店、鹿児島大学留学生と協会学生部による模擬店も全員チヤイナドレスを身に纏い元気な声で客寄せに励んでいました。今年の売上は？？苦戦とのことでしたが。

## 編集後記

大石けいじ

【辛亥革命の志士黄興と西郷】という中村義先生（東京学芸大学名誉教授）の講演を聞いてから五年がたつ。あれから、思い出すように黄興の影を追い続けている。まだその頃、黄興の時代の背景も、当時の世相も登場人物すらも遠い歴史上の出来事と思っていた。▼百年前の昨年から今年（１００７～８年）にかけてにわか仕立ての革命軍の先頭にたって袁世凱の新軍の精鋭たちと幾度となく戦っては破れ、『常敗将軍』と陰口を言われながらも挙兵の指揮をとり続けた黄興。孫文や宋教仁のような高邁な理念や、人民受けするスローガンには無縁だったけれど、その人柄と風貌から、人々に《中国の西郷さん》と慕われていた黄興。いまや建国の父と崇められ、殆どの中国人の尊敬を一身に受ける孫文の影になってしまった黄興。中国近代化の歴史の中で彼の果たした輝かしい？功績を追い続ける僕の旅は続く。▼百年前の来年（１９０９）黄興が忙しい日々をさいて尊敬する西郷の墓参りに訪れた南州公園に、協会では《黄興先生南洲墓地参詣の碑》を建てた。さほど遠くない時を隔てて二人が眺めたであろう錦江湾に浮かぶ桜島。ふたりの巨人の目はそれぞれの国の行く末をどのように眺めていたのだろう。その２年後、辛亥革命蜂起、黄興らの活躍により秦始皇帝以後２０００年続いた中国の王朝の幕は降りた。一つの時代は終わったが次の時代の幕開けには遠い苦難の道が待っていた。▼《参詣の碑》の建つ南洲公園の眺望はすばらしい。黄興の墓碑の建つ長沙の岳麓山に較べても遜色はない。こちらには燃える思いの櫻島がある。周囲には維新の志士たちの墓碑群が見守る。聖なる風が吹いている。▼この地に立って目をそっと閉じると、そこには百年前の光景が広がっている。夥しい数の中国留学生たちが太極拳を演舞中。そして再び目を閉じ直すと、中国からの大観光団が黄興をしのび二胡の流れに乗って一斉に表演している。そんな様子が眼の奥に浮かんでは消える。いつの日か、この地がそんな観光ルートになって欲しいと願う。